

KAZI

10

OCTOBER
2007

[巻頭カラー]

パネライ

クラシックヨット・チャレンジ2007

[特集]

ロンゲクルージング

のんびり、遠くへ旅しませんか?

【レース】
ジャパンカップ
パールレース
トランスパック

【トピック】
堀江謙一さんと波浪推進船
〈サントリー・マーメイドII〉
クルージングセーラーこそ使いたい
「非対称スピネーカーの魅力」
やさしいヨットレースルール解説
ナビゲーターズ・ガイド
「愛媛県・三机」

Tadamiさんの夢が走った
快速ミニ「GT-TUG 20」
ISAF世界セーリング選手権

【新艇紹介】
J/109
ヤマハSC-30

【好評連載】
ヨット、ボートのための
ナビゲーション虎の巻
ちょっと気になる古いワネ
「ピーター・ゾン30」

【付録】
マリングッズカタログ
シナコバスタイルブック
www.kazi.co.jp



それぞれのロングクルージング④

〈ベレーラ〉ガース・ウィルコック&ウェンディ・ヒンマン夫妻

準備から足かけ9年。 夫婦ふたりの太平洋周航

文=西朝子 写真=中島 淳(本誌)
text by Tomoko Nishi, photos by Jun Nakajima (KAZI)

最小限の装備で出航

7月上旬。横浜ベイサイドマリナーのビジターベースに、バックステイに星条旗、マストに日の丸を揚げたヨットが停泊していた。船名は〈ベレーラ〉。2002年に本誌で紹介した、アメリカ人夫妻のクルージング艇だ。

子供の頃、家族と一緒にセーリングクルーザーで南太平洋を回った経験のあるガース・ウィルコックさんと、長距離航海の経験こそないものの、幼少時からヨットに乗っていたウェンディ・ヒンマンさん。二人が長年の夢を叶え、外洋艇を手に入れたのは1998年のことだ。選んだフネは1979年にコールドモールド工法で建造された、31ftの木造中古艇だった。「本当はもう少し大きいのを探していた」

小型商業船のボートデザイナーであるガース・ウィルコックさん(左)は、クルージング中もテnderやドジャーなどをせっせと自作した。ウェンディ・ヒンマンさんも、幼い頃からヨットに親しんでいたという

とガースさんが言うように、40ftクラスが主流の昨今のクルージング艇から見れば、かなり小さなフネだ。しかし状態は非常に良く、ロングクルージング済みの実績と安心感があった。ほどなく、二人はフネに移り住む。そして2年の準備期間を経て、2000年の夏にホームポートのシアトルを後にした。

〈ベレーラ〉の機装はシンプルだ。特に電力を必要とする機器類は最小限に抑えている。自動操舵装置はウインドベーンのみ。GPSやVHFはあるが、レーダーはない。出航当初は、受信専用の無線機しか持っていなかったほどだ。燃料タンクは40リットル。バッテリー充電のために頻繁にエンジンを回せないため、陸電が利用できる場所以外では、

造り付けの冷蔵庫のスイッチもオフのまままだ。造水器もない。もちろん、家電製品は一切ない。

スペースの限られたフネ、特に小さなフネでのクルージングでは、物を増やさないことが快適さの秘訣となる。そうはいっても、徐々に物が増えていくのは自然の摂理だ。

「無線機を買って替え、電力を補うために風力発電機も取り付けましたよ。テnderも大きなものに作り直したしね。生活が多少不便なのはかまわないけど、安全に関わることには、ある程度出費しなきゃダメだと分かったから」(ガースさん)

アクシデント発生

シアトルを出航した〈ベレーラ〉が、まず目指したのが南太平洋だ。フレンチポリネシア、クック諸島、ミネルバ環礁、ニュージーランド、フィジー、バヌアツと巡るうちに、あっという間に3年が過ぎた。アジアにも行きたい、そしてその後はヨーロッパへも行ってみようかな。そんなことを考えていた二人は、クルージングを続ける資金を、ローンで完済した自宅を貸すことで得ていた。

しかし太平洋をほぼ半周した時、思わぬアクシデントに見舞われてしまう。ソロモンを航海中、変圧器の故障で、ほとんどの電子航海計器が使い物にならなくなってしまったのだ。GPS、VHF、無線、スピードメーター、デブスサウンダー、ラジオ、すべてがおしゃかに。状況は一変した。

「中断するしかない、そう思ったね。壊れた計器のいくつかは、やりくりしてやっ





〈ベレーラ〉の航跡

シアトル ▶ フレンチポリネシア ▶ クック諸島 ▶ ミネルバ環礁 ▶ ニューゼーランド ▶ フィジー ▶ バヌアツ ▶ クエジリン環礁(キリバス) ▶ 香港 ▶ フィリピン ▶ 台湾 ▶ 日本 ▶ シアトルへ(※主要な部分のみ)



アメリカ人デザイナー、トム・ウィリー設計の31ftスループ艇〈ベレーラ〉。フィンキール、スケグ付きのアウトボートラダー仕様で、重量は4.5トン

と買ったばかりの新品だったんだ。ショックでね。そんな時、以前会ったヨッテイーの言葉を思い出したんだよ。彼らがマーシャル諸島の米軍基地で働くつもりだ、と言っていたことを」(ガスさん)

ハワイの南に位置するマーシャル諸島には、アメリカ軍のレーダー観測基地が置かれたクエジリン環礁がある。世界最大のこの環礁には、2,000人程度の民間人(アメリカ人)が働いているのだそうだ。生き残った電子機器はハンディーGPSとノートパソコンだけという状況で、貿易風に逆らってキリバスに到着した〈ベレーラ〉は、そこから友人に連絡を取り労働許可を得ることに成功した。

「2年間、僕はエンジニアとして働き、ウェンディはウェブサイトの仕事をした。そうして得たお金で、必要な計器類を買い直したんだよ。その間にコツコツとフネの整備もしてね。上架用の船台を作ることから始めて、船底を磨き、塗料を塗って、ハードドジャーを自作した。大型のソーラーバッテリーも買い足したよ」(ガスさん)

「スーパーマーケットもあるし、映画館もあるのよ。マクドナルドはなかったけど、アメリカの文化に飢えていた私たちには、ありがたい場所だった。もちろんダイビングをしたりと、美しい珊瑚礁の島も存分に楽しんだしね」(ウェンディさん)

時にはマンネリ気味にもなるロングクルージング。アクシデントが原因とはいえ、一時的に陸へ上がり、社会生活をしたことはほどよい刺激になったようだ。2006年3月、二人は気持ちも新たにクルージングを再開した。

ホームポートを目指して

クエジリン環礁を出航し、東アジアへと進路を向けた〈ベレーラ〉だが、この地域には台風というやっかいな問題があった。クルージングシーズンは意外に短いのが現実だ。

「本当はもっと時間をかけて回りたかったのよ。でも香港に着いた途端に、大型の台風が発生してね。結局、台風シーズンが終わるまで動けなかったわ」(ウェンディさん)

香港には9か月滞在した。この調子でいたら、見たい所を回るのに何年かかるか分からない。そう判断した二人は、フィリピンと台湾、そしてどうしても訪れたいと思っていた日本を最後に、シアトルへ戻ることを決めたのだった。

「今は複雑な気分よ。もうすぐクルージングが終わるといふ寂寥感と、故郷に帰るといふ安堵感がごちゃ混ぜになってね」

と話すウェンディさんの横で、ガスさんが口を開いた。

「シアトルに戻れば、確かに一区切りがつくよね。でもそれで終わりじゃない。また出ればいいんだから。実はもう、次のフネの設計を終えているんだ。40フィートのセンターボード艇。これなら、ヨーロッパの運河にも行けるだろう」

戻ってからのことは、まだ何も決めていないという二人だが、いつかヨーロッパをクルージングしたいという夢は共通のようだ。

「クルージングなんて、予定通りにはいかないものだよ。次の寄港地だって確定していないんだから。だって風まかせ



コンパニオンウェイから見た〈ベレーラ〉のキャビン。メインキャビンに収納キャビネットがないため、31ft艇とは思えないほど広々とした印象だ



大きめのシートブロックは、デッキを傷つけないよう皮の袋で覆っている

の旅だからね」

7月中旬に横浜を出航した〈ベレーラ〉は、8月15日現在、ハワイの北をセーリング中だ。準備期間も含めると9年の歳月を費やした今回のクルージング。最終レグも残すところあと半分である。

〈ベレーラ〉の家計簿

費用はエリアによって大きな差が出た。太平洋地域で物価が高いのは、マルケサスやタヒチなどを含むフレンチポリネシア。ハリケーンシーズンに長期滞在したニューゼーランドでは、計器類を購入したり、フネの整備をしたため出費がかさんだ。普段は入江での錨泊が基本(係留費に頭を悩ませたのは日本くらい)。自炊をすれば食費もそれほどかからない。クルージング中、最もお金がかかるのがメインテナンス。特にセールやリギンの損傷、電子航海計器のトラブルはいつ起こるか分からないので、必ず予備費を確保しておきたい。